

元和年間作成の石見国絵図について

川村博忠

- I. はじめに
- II. 絵図の様式・内容
- III. 作成年代の検討
 - (1) 下限の推定 一浜田城下部分の張り替え修正一
 - (2) 上限の推定と石高帳による傍証
- IV. 内容の特徴としての銀山・口屋番所・銀山城の描写
- V. 寛永石見国絵図との内容比較
 - (1) 寛永国絵図の系統分類
 - (2) 元和「石見国絵図」と寛永石見国絵図の比較
- VI. おわりに

I. はじめに

江戸幕府が全国的規模で実施した国絵図事業は慶長度を初回とし、続いて正保、元禄、天保の4回であり、そのほかにも寛永年間には諸国へ派遣した国廻り上使によって諸国の国絵図が幕府に収納されている。以上のように全国一斉にとりまとめた国絵図のほかに、幕府は必要に応じて関係諸国へ個別的に国絵図の調進を命じていた¹⁾。

とりわけ江戸初期においては大名の所領替えが頻繁であって、そのために諸国の地図を手中におくことが幕府にとっては不可欠の要件であったと考えられる。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦い後にひとまず大名の配置が定まったが、慶長19年(1614)から翌元和元年にかけての二度にわたる大坂の陣で豊臣氏を滅ぼし

たあとの再配置によって大名の所領はさらに大きく変動した。その後も幕府は徳川政権確立のために、諸国の大名にたいする懐柔と統制の巧みな政策で所領の配置換えを頻繁におこなった。

このような江戸初期のはげしい大名異動も3代將軍家光の寛永年間をもってほぼ終了しており、この期において全国的な大名配置が完了して幕藩体制が完成したとみられている。そして、正保元年(1644)に開始された全国一斉の正保国絵図の作成事業は、まさに徳川政権による諸大名への所領配分の総仕上げとしての図面作成であったとみなすこともできよう。

ところで、正保国絵図以前に作成された江戸初期の幕府国絵図に関しては、未だ十分な解明がなされていないが、近年この方面に関心をもつ研究者が現われてきたことは喜ばしい傾向である。筆者は先に寛永国絵図とみられる全国一揃いの国絵図の現存することを紹介した²⁾が、上原秀明や磯永和貴も寛永年間の国廻り上使と関連した国絵図や九州図の事例を報告しており³⁾、白井哲哉は「日本六十余州国々切絵図」に含まれる下総国絵図の内容を検討して、その成立が寛永期である可能性を報告している⁴⁾。

江戸初期国絵図については関連文書が不足していて、この方面の研究の進展を阻んでいるが、慶長国絵図をはじめとして元和・寛永期頃の作成と考えられる国絵図自体は少数ながら各地に現存している。江戸初期国絵図作

成の実体を究明するためには、まずは現存する国絵図個々の内容を綿密に分析して、その成立期をはっきり確認する基礎的な作業が必要であろう。そのような観点で本稿は浜田市教育委員会が所蔵する「石見国絵図」⁹⁾の成立時期を検討して、その内容の特徴を明らかにしようとするものである。

II. 絵図の様式・内容

当該「石見国絵図」(カラー頁の図1)には表題の記載はなく、ここに示した題名は所蔵先で整理上に用いられる資料名である。来歴不詳の本図は石見国の一国全域を範囲として描いた大型の極彩色絵図であって、図面の寸法は縦173cm、横350cmである。石見国の6郡が明瞭に区分され、小判型の村形を用いて示される村々は所領別に色分けされている。図面の方位を示す東・西・南・北の4つの文字は四辺の中央ではなく、上辺の右寄りに「南」、下辺の左寄りに「北」、右寄りに「西」、左辺の上寄りに「東」の文字がそれぞれ内側に向けて書かれている。つまり、図面の方位は四辺を東西南北には配さず、おおよそ四隅を東西南北に配置している。山々の描写や文字の記載方向など図面の構図は天地がはっきりしており、日本海側(北西)から中国山地側(南東)をみた図柄で描かれている。ただし、津和野城下の背後にそびえる長門との国境の山稜線は閉塞空間的な表現で描画されている。

以下に本図の内容上の特徴を概観してみる。

図形 図面の左辺(北東)と下辺(北西)を海で限り、上辺(南東)は出雲・備後・安芸との国境の山々、右辺(南西)は長門との国境の山々で限っていて、描かれる石見国の輪郭はほぼ方形を呈している。実際には石見国の海岸線は出雲境から長門境まで北東から南西に向けてのほぼ一直線であるが、本図ではその海岸線が温泉津付近で屈折し、全体として海岸線がL字形を呈していて実際とは大

きく相違している。

地勢 出雲、備後、安芸、長門との国境の山々を濃い緑色にて険しい山容に描き、国内の多数の山々は薄い緑色の着色にて山頂を低くまろやかに描いている。出雲境の「三瓶山」と那賀郡内の「大麻山」については山容の強調的な表現が目立っていて、この二つには山名が記されている。三瓶山(1,126m)は出雲との国境にそびえる円頂丘火山で、石見の平野部からの眺望は雄大で、伯耆の大山とともに山陰の名山である。大麻山(596m)は浜田港の海岸近くにそびえる山で、古来山見航法による目標の山であり、また信仰の対象ともなっていた霊峰で、石見名所の一つでもあった。三瓶山や大麻山は近世の石見において一種のランドマーク的存在だったのであろう。

図面のほぼ中央には、中国山地を横断して石見国内へ流れ下る「江之川」が、大きくS字状に湾曲して描かれている。河幅を異常に広く描いており、国内ではこの川の存在が強く意識されていたことが窺われる。水域では海面に波縞模様が描かれているのが注目され古い様式である。

郡村 国内の邇摩・安濃・邑智・那賀・美濃・鹿足の6郡全域を描いていて、郡境には肉太の黄線が引かれており郡区分は明瞭である。正保度以降において江戸幕府の国絵図では郡界線が黒線に固定されるので、本図はそれ以前の古い成立であることを思わせる。各郡には長方形の枠をもつ郡付があって、枠内には郡名と郡都合高を記し、幕府領のほかに大名領があれば、その所領高が記載されている。那賀郡の郡付を例示すれば右図のごとくである。

郡内村々の所在は小

高 三 万 五 千 四 百 五 拾 石 式 斗 三 升
那 賀 郡
内 惣 万 式 千 六 百 九 拾 三 石 六 斗 六 升 三 合
亀 井 分

表1 石見国絵図に記載される郡村名と石高

郡村名	石高	領分	郡村名	石高	領分	郡村名	石高	領分
安濃郡 石 12,852.290			17 礪武	610.466		16 畑田	220.944	
1 延里	316.210		18 鬼村	274.340		17 長藤	175.074	
2 土江	298.700		19 大屋	330.742		18 潮村	47.465	
3 鳥井	391.873		20 赤波	159.889		19 都賀行	341.234	
4 野井	408.302		21 今市原	309.414		20 都賀本郷	254.912	
5 用田	396.224		22 先市原	128.696		21 上野村	247.137	
6 鳥越	269.220		23 久利	707.627		22 久喜	179.477	
7 羽根西	352.830		24 松代	141.690		23 銀山久喜	8.950	
8 羽根本郷	645.406		25 行恒	343.753		24 大林	71.328	
9 仙山	180.108		26 稲用	459.583		25 銀山大林	11.226	
10 大田北	747.257		27 静間	503.310		26 地頭所	163.230	
11 大田南	658.496		28 萩原	269.805		27 櫛谷	137.480	
12 大田嘉土	459.450		29 大家本郷	887.270		28 内田村	193.155	
13 上山	312.560		30 新屋	527.110		29 京寛原	159.126	
14 長原	146.703		31 佐喜	114.480		30 久喜原	147.262	
15 志学	523.050		32 福田	197.520		31 河内	153.158	
16 加淵	161.531		33 殿村	163.240		32 惣森	148.950	
17 円城寺	220.967		34 井尻	126.220		33 志君	130.480	
18 池田本郷	1,094.637		35 井田本郷	420.210		34 小松寺	225.598	
19 市原	127.790		36 津淵	190.230		35 小林	135.444	
20 小屋原	576.403		37 大田	496.090		36 奥山	176.400	
21 河合	1,544.088		38 横道	159.540		37 吾郷	405.830	
22 多根	279.436		39 波積本郷	246.230		38 高畑	124.970	
23 吉永	676.670		40 波積北	408.230		39 乙原	228.956	
24 小豆原	116.246		41 福光下村	177.720		40 河本	754.690	
25 山中	350.869		42 林村	167.440		41 小谷	158.280	
26 才坂	214.224		43 本領	305.180		42 河下	654.380	
27 朝倉	187.039		44 吉浦	87.450		43 三俣	211.829	
28 神原	201.803		45 神村	190.649		44 湯谷	392.101	
29 刺賀	993.698		46 南畑	221.210		45 馬野原	112.270	
邇摩郡 石 17,049.720			47 祖式	1,292.241		46 佐木	272.878	
1 佐摩	348.638		邑智郡 石 29,980.570			47 三原	352.976	
2 西田	445.461		内亀井分 1,480.923			48 田窪	316.093	
3 湯里	590.674		1 九日市	342.517		49 大貫	150.140	
4 温泉津	119.702		2 福原	405.145		50 谷住郷	407.913	
5 小浜	189.260		3 別府	218.547		51 八色石	231.989	
6 飯原	147.144		4 湯抱	137.950		52 宮内	341.226	
7 荻村	336.770		5 粕淵	432.660		53 原村	715.378	
8 白坏	374.850		6 窪村	289.620		54 村郷	277.656	
9 三久須	160.057		7 浜原	228.297		55 布施	259.511	
10 戸蔵	90.762		8 川戸	248.102		56 比敷	75.336	
11 忍原	350.160		9 石原	189.105		57 市山	1,459.211	
12 大国	1,454.490		10 千原	?		58 渡	228.820	
13 天河内	378.334		11 熊見	130.784		59 田津	81.590	
14 馬路	165.988		12 片山	128.625		60 因原	205.008	
15 仁万浦	684.885		13 酒谷	203.047		61 鹿加	78.953	
16 宅野浦	343.961		14 塩谷	198.868		62 築瀬	240.880	
			15 井戸谷	179.040		63 亀村	204.887	
						64 滝原	101.692	
						65 信貴	202.833	

	郡村名	石高	領分		郡村名	石高	領分		郡村名	石高	領分
66	高見	410.443		25	波佐	933.280	○	76	西村	493.002	
67	宇津井	368.070		26	宇栗	129.940	○	77	門田	113.325	
68	日和	561.019		27	久佐	907.360	○	78	周布	286.820	
69	木須田	85.172		28	来原	801.561	○	79	長浜	642.716	
70	都賀西	390.905		29	長見	215.438	○	80	日脚	194.237	
71	口羽	876.334		30	小坂	237.878	○	81	原井	216.039	
72	上田	635.304		31	田ノ原	161.664	○	82	津間	32.265	
73	戸河内	431.753		32	永安	1,318.160	○	83	折居	142.987	
74	阿須那	498.915		33	原井	747.665		84	平原	148.806	
75	今井谷	57.742		34	黒河	1,097.760		85	西河内	334.835	
76	井原	987.904		35	浅井	329.134		86	岡崎本郷	517.145	
77	鱒淵	516.381		36	長沢	196.736		87	古市場	582.171	
78	八日市	937.888		37	下府	784.587		88	岡見	564.823	
79	和田	304.893		38	久代	260.130		89	向ノ田	358.756	
80	雪田	296.284		39	波子	96.706		90	河内	210.599	
81	中野村	1,176.193		40	うやか	344.863		91	矢原	251.144	
82	矢上	1,515.928		41	都野津	182.071		92	井村	1,769.300	○
83	田所	630.670		42	江田	59.010				石	
84	亀谷	306.470		43	嘉久志	209.983		美濃郡		26,362.025	
85	市木	1,329.103		44	千金	108.152		内亀井分		1,410.576	
86	長谷	646.173	○	45	高田	53.017					
87	福原	265.860	○	46	本郷	523.390		1	向津茂	270.329	
88	日貫本郷	456.540	○	47	都野村	672.088		2	宇治	115.529	
89	簾村	112.350	○	48	千田	300.071		3	金山	156.017	
		石		49	大津	59.095		4	平原	186.893	
那賀郡		35,450.230		50	後野	359.917		5	土田	197.457	
内亀井分		12,693.663		51	姉金	80.610		6	木部	205.190	
1	畑田	186.436		52	有福	470.490		7	津田	297.987	
2	北川上	1,468.118		53	南川上	606.072		8	遠田	485.201	
3	都冶本郷	507.061		54	阿刀	1,124.797		9	久城	284.543	
4	都冶後地	442.193		55	本明	408.615		10	下本郷	288.235	
5	黒松	142.410		56	本明	402.314		11	中津	30.431	
6	渡津	135.074		57	宇野	402.314		12	中嶋	208.999	
7	大田	102.874		58	宇都井	216.361		13	乙吉	290.754	
8	和田	654.340	○	59	七条	328.749		14	上本郷	866.464	
9	重富	205.630	○	60	井木	104.773		15	吉田	1,187.770	
10	本郷	322.900	○	61	細谷	141.005		16	地頭所	109.160	
11	来田	683.023	○	62	鍋石	104.988		17	多田	177.088	
12	追原	550.136	○	63	野坂	313.784		18	乙子	273.730	
13	入野	☆420.469	○	64	栃木	280.764		19	大谷	197.500	
14	佐野	404.558	○	65	木東	613.081		20	久々茂	410.850	
15	田原	51.290	○	66	西郷	149.771		21	篠倉	431.600	
16	今福	518.786	○	67	黒沢	432.501		22	小原	178.468	
17	長屋	128.450	○	68	上古和	241.314		23	朝倉	170.408	
18	丸原	508.870	○	69	下古和	243.194		24	三谷	379.500	
19	今市	443.370	○	70	田橋	347.359		25	仙道本郷	493.790	
20	鼠原	?	○	71	内村	794.784		26	久原	258.700	
21	都川	?	○	72	中湯	62.378		27	津茂	776.540	
22	柚根	148.940	○	73	吉地	114.315		28	丸茂	570.176	
23	徳田	90.810	○	74	和田	67.398		29	下波多	365.320	
24	小国	202.430	○	75	室谷	131.621		30	上波多	419.030	
					蘆谷	364.424		31	広瀬	130.755	

	郡村名	石高	領分		郡村名	石高	領分		郡村名	石高	領分
32	千原	46.354		83	黒谷	888.120	○	46	野中	295.950	○
33	澄川	246.641		84	柱ヶ平	585.710	○	47	本郷	540.100	○
34	小平	32.790		85	柏原	343.910	○	48	七村	885.920	○
35	内谷	158.315				石		49	三渡	62.239	○
36	内石	114.635			鹿足郡	26,362.025		50	商人	57.270	○
37	七村	22.355			内亀井分	14,817.962		51	畑村	60.050	○
38	道谷	155.800		1	銀山日原	91.949		52	京良峠	31.660	○
39	西村	305.290		2	銀山中木原	22.016		53	栗原	88.750	○
40	東村	468.878		3	銀山石ヶ谷	20.012		54	岩瀬戸	64.480	○
41	道川	228.152		4	銀山十王堂	15.850		55	紺灰	18.520	○
42	見葛	125.060		5	銀山畑ヶ追	9.220		56	野中	66.930	○
43	広見河内	33.495		6	須川	225.020	○	57	鹿谷	50.565	○
44	木阿見	176.560	○	7	枕瀬	388.030	○	58	才ヶ田原	75.514	○
45	戸田	308.660	○○	8	野口	80.480	○	59	福谷	99.800	○
46	美濃池	887.020	○○○	9	脇元	86.560	○	60	板持	181.800	○
47	滝谷	115.920	○○○	10	野地	117.810	○	61	須通	126.870	○
48	原村	234.330	○○○	11	添谷	157.330	○	62	下山	62.140	○
49	馬谷	437.057	○○○	12	小瀬	87.890	○	63	中村	278.000	○
50	大屋形	271.310	○○○	13	柳村	103.419	○	64	三分一	234.590	○
51	栃山	227.626	○○○	14	宿谷	63.035	○	65	平野	144.390	○
52	猪登木谷	128.187	○○○	15	野地	126.120	○				
53	佐々田原	105.218	○○○	16	程ヶ野	193.440	○				
54	西長沢	117.525	○○○	17	直地	286.770	○				
55	東長沢	149.218	○○○	18	後田	?	○				
56	板井川	168.750	○○○	19	千原	97.920	○				
57	宇津川	422.490	○○○	20	高野	95.650	○				
58	北仙道	2,081.390	○○○	21	木部	963.740	○				
59	佐ヶ山	102.000	○○○	22	奥賀野	93.040	○				
60	小俣賀	172.390	○○○	23	市尾	63.650	○				
61	本俣賀	277.396	○○○	24	高田	955.480	○				
62	梅月	292.886	○○○	25	鷲原	?	○				
63	本横田	907.931	○○○	26	森	246.000	○				
64	向横田	363.423	○○○	27	寺田	174.620	○				
65	三星	84.150	○○○	28	篠山	135.660	○				
66	寺垣内	243.731	○○○	29	福川	308.070	○				
67	薄原	118.630	○○○	30	椈谷	167.340	○				
68	安富	593.975	○○○	31	柿木	611.540	○				
69	角井	173.655	○○○	32	横道	159.260	○				
70	打田	115.860	○○○	33	高尻	562.890	○				
71	飯田本郷	379.840	○○○	34	大野原	450.600	○				
72	須子	☆334.626	○○○	35	蓼野	307.510	○				
73	高津	382.141	○○○	36	朝倉	326.760	○				
74	持石	52.240	○○○	37	注連川	335.270	○				
75	門田	100.330	○○○	38	立戸	240.100	○				
76	市原	250.191	○○○	39	広石	435.180	○				
77	松原	197.510	○○○	40	沢田	294.910	○				
78	白上	693.440	○○○	41	六日市	152.500	○				
79	虫追	157.460	○○○	42	立河内	541.420	○				
80	金地	103.270	○○○	43	九郎原	306.150	○				
81	小松原	59.660	○○○	44	大倉	168.560	○				
82	飯浦	204.890	○	45	富貴	598.900	○				

備考：「領分」欄の○は亀井領，「石高」欄の☆は判読不可能のため元和3年石高帳（本文注3）の記載による。？は判読不能。

判型の村形を用いて図示している。村形の枠内には村名と村高を記し、村高は石以下の斗升合まで記入している。村名に「村」の下字を付したものはごく少数であって、多くの村では集落の呼称だけで「村」の下字を付していない。村名の文字と村高の数字には、折れ皺に起因する図面の磨耗により一部に判読できないものもあるが、全体はほぼ表1のような内容である。

城 図中には3ヵ所に城郭が描かれている。東端の邇摩郡に「銀山御城」(山吹城)、中央部の邑智郡の海辺に「浜田城」、西端の鹿足郡に「津和野城」が描かれている。いずれも屹立した山体の頂上に堅固な城郭が写實的に描写されていて威風を呈している。ただし、浜田城とその城下の部分は明らかに後で描き加えられたものと観察されるので、このことについては後で詳述する。

山吹城は周防山口の大内氏が銀山守備の本拠として築いた堅固な山城であって、中世には戦国大名による銀山争奪をめぐる攻防の舞台となったが、関ヶ原の戦い後に石見国が徳川氏の支配に入ったあと、間もなく廃城になったとみられている。津和野城は鹿足郡の山間盆地にあって屹立した山頂に城郭が描かれている。その山麓には城主の居館とみられる建物と町家の並ぶ城下町の景観が描かれている。

所領 領主ごとの所領区分は村形の色替えによって示されている。黄土色の村形で示す村々が津和野城主亀井氏の領地である。亀井領以外の村形はすべて着色がなく白抜きのみであって、これらの村々はすべて幕府の直轄する公領である。石見国では元和5年(1619)以降には浜田藩が成立して、那賀郡を主体にして5万石余を領した。また寛永20年(1643)から天和2年(1682)までの40年間は吉永藩1万石も存立し、安濃郡吉永村に領主の陣屋をおいていた。しかし、本図には浜田藩領と吉永藩領の記載はなく、津和野藩領と公領で国

内を二分して図示するだけである。

所領の地域割りをみると、国内の西端で津和野城のある鹿足郡は銀山を除き全ての村が津和野城主亀井氏の領地になっている。東に続く美濃郡と那賀郡は各々半分が亀井領であって、残る半分は幕府領である。さらにその東に続く邑智郡では那賀郡に隣接する長谷・福原・日貫本郷・簾の4村だけが亀井領であって残りは東に続く邇摩郡および安濃郡を含めて全てが幕府領となっている。国内の西部から中部にかけての地域、つまり江の川以西に亀井領は広がっているが、その領地は必ずしも一体的にまとまっておらず、幕府領を介在して飛地を形成していたことが分かる。

道 道筋はいずれも朱線を引いて表現されている。道筋に一里山の表示はない。石見国内の近世における主要な道は山陰道と銀山街道であった。山陰道は出雲国境から海岸沿いに西進して温泉津・浜田・益田を経て長門へ抜ける道であって、地元では内陸部を通して石見銀山から津和野へ通ずる中道に対比して海辺道とも呼ばれていた。銀山街道は大森銀山から中国山地を越えて瀬戸内の尾道へ通ずる道で、石見国内では温泉津から石見銀山・荻原・九日市を経て酒谷で出雲へ抜けていた。このような主要街道と内陸の村々をつなぐ道筋が朱引きされているが、そのような脇道も主要道と区別されずに同じ太さの線で表されている。注目されるのは、浜田藩成立後に浜田と広島を結ぶ陰陽主要道となる三坂峠越えの街道が未だ本図には表れていないことである。

主要道には要所間の里程が注記されている。例えば山陰道の出雲国境には「銀山より始末屋迄六里」、山陰道の江津には「銀山より江津まで七里」、山陰道が長門へ抜ける西端の村である飯浦には「津和野より飯浦まで八里」とある。銀山街道の山越えにて出雲へ抜ける酒谷には「銀山より酒谷まで八里」とある。津和野には「益田より津和野まで八里、銀山

より合三十里」とある。里程記載の多くは主要集落間の距離を記しているが、長距離の里程記載はいずれも銀山と津和野城下を起点としての距離が示されている。

III. 作成年代の検討

(1) 下限の推定 一浜田城下部分の張り替え修正一

前述のごとく、図面の中央部下端の邑智郡の海辺に「浜田城」とその城下町の家並みが描かれている。しかし、よく注意して見ると、浜田城とその周辺部分は縦40cm、横50cmばかりを四角に切り抜いて、そのあとに張り替えが施されていることが分かる。したがって、この部分は元来の図面に描かれていたものではなく、あとで描き替えられたものと考えられる。

この張り替えの部分は彩色の色合いもやや薄目であって、元来の図面部分とは色調が微妙に異なっている。張り替えの際に切断された村形は、元来の部分と後補の部分の縁線に微妙なずれのあるのを観察できる。浜田城下周辺の7～8個の村形は他の全ての村形に比べて異常に小さく図示されている。これは浜田城とその周辺に城下の家並みを描き加えたためにスペースが不足し、元来描かれていた村形が城下町の端に小さく縮めて寄せ集められたためとみなされる。

また、周辺から浜田城下へ通ずる幾筋もの道筋は、切り抜き線で切断されたままで終わり、張り替え部分には道筋の続きが引かれていない。城下町を描き加えて7～8個の村形を城下の周辺に移動させたことにより、村々の図示位置が不自然となり、村々をつなぐ道筋の朱引きができなくなったのであろう。そのほか海面では紺色を塗るだけで波形模様をほどこしておらず、元来の海面とは描き方の違いが認められる。

既に述べたように、図中の所領区分では幕府領と津和野藩領が区別されているだけで、

浜田藩領は表わされていない。浜田藩領のない図示内容からすれば、本図の作成は浜田藩成立の元和5年(1619)2月以前であって、この図面にはもともと浜田城とその城下町は描写されていなかったものと考えられる。つまり、この「石見国絵図」には元来浜田城とその城下町は描かれていなかったが、築城後のいずれかの時期に張り替えによってそれを描き加えたものと考えざるを得ない。

(2) 上限の推定と石高帳による傍証

以上に述べた通り、当該「石見国絵図」は石見国が幕府領と津和野藩領によって二分されていただけで、いまだ浜田藩の成立をみない時期に作成されたことが推定される。つまり、本図成立の下限が元和5年(1619)2月と推定されたので、次にはその上限について検討してみたい。

戦国末期に毛利氏が支配した石見国は、関ヶ原の戦後処理により一国全域がいったん幕府の直轄地となったが、慶長6年(1601)には石見国の一部、鹿足郡を主体にする3万石が坂崎直盛に与えられた。直盛は中世以来吉見氏が拠っていた津和野三本松城の大改修を行って城下町の整備を行った。しかし、坂崎直盛は元和2年(1616)千姫事件で死去して除封となり、坂崎氏の支配はわずか15年間で終わった。

翌元和3年7月津和野には代わって因幡の鹿野から亀井政矩が4万3000石で入封した。坂崎氏に次ぐ亀井氏の津和野藩主時代まで石見国の支配は、佐摩郷の銀山を抱えて国内の大半を占める幕府領と国内のほぼ3分の1の津和野藩領で二分されていた。ところが、同国には元和5年(1619)2月、大坂の陣の戦功により古田重治が伊勢松阪より浜田へ5万400石で入封した。重治は新領地の浜田川河口右岸に城地を定め、これを亀山と改称して築城と城下の町割りを行ったという⁶⁾。浜田藩の所領は国内中央部の那賀郡を主にして、東西の

両側に隣接する邑智郡と美濃郡に及んだので、その結果、石見国は東から幕府領、浜田藩、津和野藩領に三分されることになった。

そこで、当該「石見国絵図」には幕府領のほかには亀井氏の津和野藩領が示されているので、この図の成立の上限は亀井氏の津和野藩が成立した元和3年と推定される。以上の検討結果を総合すると、この「石見国絵図」は亀井氏の津和野入封のあと、古田氏の浜田入封以前、つまり元和3年(1617)7月から同5年(1619)2月までの期間内に作成されたものと考えられる。

ところで、亀井氏が石見国へ入封した元和3年の亀井領石高帳の写が残っているので、これによって本図に記載される内容を照合することができる。この石高帳写は『石州御蔵内亀井豊前守殿相渡候分』⁷⁾であって、元和3年に亀井政矩が津和野へ入封する際に、石見国内の幕府領を割いて供与された村々の石高を書き出した帳面である。津和野の前領主坂崎氏の所領高は3万石であったが、次の亀井氏は4万3000石を拝領しての入封であったことから、坂崎氏の全所領を引き継ぐのに加えて石見国内の幕府領から1万3000石を分け与えられた。この村高帳にはそのときの追加供与分40カ村の村名と村高が列記されていて、最後にその合計「高合壹万三千石九斗壹合」が記され、奥書には「元和三丁巳年也、巳八月十三日」の日付がある。

「石見国絵図」に記載の内容をこの村高帳と照合すると、40カ村のすべての村は亀井領に含まれていて各々の村高も完全に一致する。ただし、那賀郡の亀井領のうち「井村」と「田原」の村形は修正が加えられている。「井村」については、近辺に位置する幕府領の村である「蘆谷」と同じように胡粉を塗って修正されているので、両者の図示位置が誤記されていたことから相互に入れ替えて修正したものとみられる。また、那賀郡のうち「田原」の村形の色は橙色で、亀井領の黄土色とは色合

いがやや異なっている。この村は元和3年拝領のときは亀井領に含まれていなかったが、その後元和5年9月までの間には亀井領に加えられたようである⁸⁾から、絵図作成時には幕府領として白抜きで塗り替えたものが、後で亀井領に塗り替えられたのであろう。

IV. 内容の特徴としての銀山・口屋番所 ・銀山城の描写

石見国は日本でも有数の銀産国であった。江戸幕府はこれを重視し、近世を通して石見銀山のすべてを幕府の直接支配下においていた。元和年間作成のこの「石見国絵図」は、江戸初期のころ最盛期にあった石見銀山の様子を克明に描いていることでも興味ぶかい。

石見銀山のうち規模のもっとも大きいのは邇摩郡佐摩郷の銀山で、現在では一般に大森銀山と呼ばれている旧銀山である。この佐摩郷の銀山は16世紀前半期、天文年間の本格的な開発以来、永禄5年(1562)に毛利元就によって占有されるまでおよそ30年間に及んで、周防の大内氏、石見の小笠原氏、出雲の尼子氏など戦国大名の間で激しい争奪戦が繰り返された。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの後は徳川家康によって接收され、以来幕府が派遣した代官によって銀山の経営が行われた。初代の銀山奉行として石見に入った大久保長安が、間歩(まぶ)と呼ばれる坑道を新たに開いて銀山開発に努めた結果、慶長から寛永期にかけての産銀量は年間8千貫から1万貫ほどもあったと推定されていて、この頃が石見銀山の最盛期であったとみられている⁹⁾。

「石見国絵図」によると、佐摩郷の銀山は集落を含めた谷間の地域一帯に広くめぐらした木柵列によって囲まれている(図2)。一般に江戸時代にはこの柵列でとり囲まれた鉱山地域を山内(さんない)と呼んで在方と区別し、柵列の総延長は5,147メートルにも及んでいたという¹⁰⁾。山内の中央部を南から北へ貫流する銀山川の谷筋にそって主要街道(銀山街

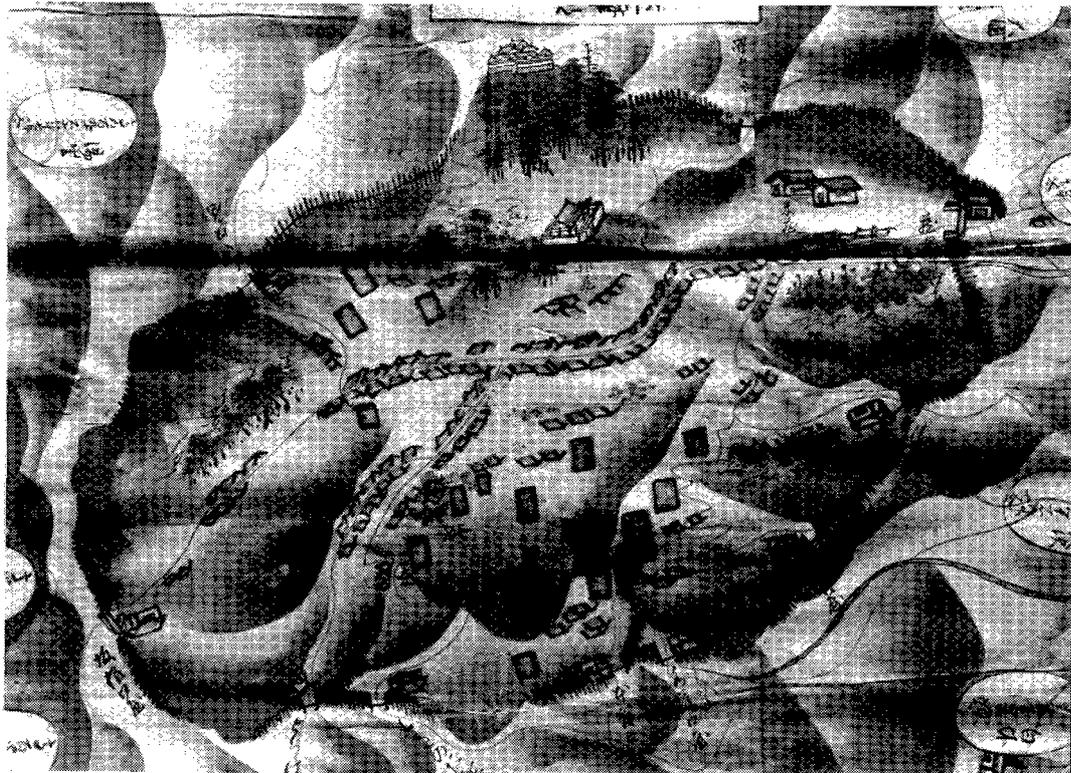


図2 「石見国絵図」の佐摩郷銀山部分（上部に「銀山御城」が描かれている）

道)が通っており、街道の両側に街村状の家並みがぎっしりと描かれていて、町的集落の形成を窺わせる。山内から外に抜ける道筋10カ所の出口にはいずれも「口屋」と記す番所が設けられていて、木戸と番屋の絵が描かれている。主要道が「佐摩」村へ抜ける出口には「蔵泉寺口屋」、温泉津方面へ向かう出口には「坂根口屋」と記すように、10カ所の口屋にはいずれも名称がつけられている。

山内の東端には要害山が切り立っていて、その山頂には「銀山御城」と記す城郭の描かれているのが注目される。この銀山城は、延慶2年(1309)大内弘幸が銀山を守るために築いたと伝えられている山吹城である。築城以来中世には銀山争奪戦の拠点となったが、銀山が江戸幕府の支配下に入り、幕府政権が確立するとやがて廃城になったとみられている。現地には今でも大規模な階段状の郭や空堀の跡、石垣などが残っている¹¹⁾。しかし、この山

吹城の景観を伝える資料は、この絵図において他には残されていないという¹²⁾ので、この「石見国絵図」はその実像を語る唯一の資料ということになる。この国絵図より25年ほどあとに作成された石見の正保国絵図には柵列で囲まれた銀山の描写はあるものの、山吹城は描かれていない。

「石見国絵図」によると、山吹城の築かれた要害山の山麓には高い土塀に囲まれた「銀蔵」があり、その南にはやや離れて2棟の「米蔵」が建っている。北方向の「はきのたを口屋」へ出る道筋の側には高床式の「山神」社が描かれている。そのほか山内の描写でとくに注目されるのは、間歩(まぶ)と呼ばれる坑道の入り口が角印をもって図示されていることである。山内に合わせて14個の間歩の所在が示されている。当時の間歩の数やその所在位置が具体的に確認できることも、山吹城の城郭景観とともに注目される内容である。

口屋番所は佐摩郷銀山の出入口を固めているばかりでなく、国内のうち幕府領の道筋の要所要所および国境などに数多く設けられていて、木戸をもつ番所の景観が物々しく描かれている。津和野藩領内には番所の描写が見られないことから、江戸初期において石見銀山にたいする幕府の監視がいかに厳重であったかを認識させる内容である。

大規模な佐摩郷の銀山のほかにも、国内には8カ所の銀山の所在が図示されている。東から大林・久喜（以上邑智郡）、向津茂（美濃郡）、日原・中木屋・石ヶ谷・十王堂・畑ヶ迫（以上鹿足郡）である。これらの銀山は小判型の村形とは区別してやや大きな長方形の図式で示していて、その周りにはやはり木柵が巡らされている。ただ、何故か大林銀山のみには木柵の囲みがみられない。恐らく戦国期に開発されたものと考えられるこのような小規模な銀山が石見国内に散在していて、江戸初期の頃には幕府の直轄管理下にて稼働していたことを窺わせる。

V. 寛永石見国絵図との内容比較

筆者は先に寛永期に由来するとみなされる国絵図写の全国一揃いがないしはその一部が秋田県公文書館など4機関に現存することを紹介した¹³⁾。その後岡山大学附属図書館（池田家文庫）にも全国のうち尾張と播磨の2カ国を欠くものの、残り66カ国分が揃って現存することも知り得たので別稿にてふれておいた¹⁴⁾。これら5機関に所蔵される寛永国絵図諸本のなかには、いずれも石見国絵図が含まれている。

これら寛永国絵図は寛永10年（1633）の幕府国廻り上使によって集められた国絵図に基づくものと考えられるので、当該元和「石見国絵図」はそのおよそ15年前に成立していたことになる。したがって、石見国における元和と寛永両期の国絵図内容を照合して、江戸初期15年間におけるこの国での地域変化をさぐっ

てみたい。

(1) 寛永国絵図の系統分類

筆者は先の拙稿¹⁵⁾にて所蔵先の異なる寛永国絵図は地物の描写・彩色に精粗の違いこそあれ、事物の図式や表現法に相違はないものとみていたが、今回改めて5所蔵機関の諸国の国絵図を比較してみたところ、内容に基本的な違いはないものの、城の表現図式に違いのあることが判明した。図中に示される城の図式をもって分類すると、現存の寛永国絵図は永青文庫蔵図（永青本と略称する）・南葵文庫蔵図（南葵本と略称する）のAグループと秋田県公文書館蔵図（秋田本と略称する）・池田家文庫蔵図（池田家本と略称する）・毛利家文庫蔵図（毛利家本と略称する）のBグループの2系統に分けられる¹⁶⁾。

Aグループでは諸国の城が丸四角型¹⁷⁾と丸輪型¹⁸⁾の両様の図式にて選択的に図示されている。それに対してBグループでは全国すべての城が共通して丸四角型の図式で図示されている¹⁹⁾。Aグループの場合、例えば因幡国では鳥取城が丸四角型であるのに鹿野城は丸輪型、但馬国では出石城が丸四角型であるのに豊岡は丸輪型、備中では松山が丸四角型であるのに成羽・足守・庭瀬の3カ所は丸輪型、防長では萩が丸四角型であるのに岩国は丸輪型にてそれぞれ図示されている。永青・南葵両本はともに10数カ国分しか残されていないため全国的な一覧はできないものの、以上のような数カ国の事例から考えると、Aグループでは城主格（城持ち）大名の居城と無城主格大名の居所（陣屋）をはっきり区別して、前者を丸四角型図式で、後者を丸輪型図式で図示しているように思われる。

ところで、寛永国絵図諸本中の石見図において、石見国内に所在する津和野城と浜田城の表現図式をみると、Aグループ図では津和野城が一般的な丸四角型の居城図式で示されているが、浜田城は丸輪型の図式で示されて

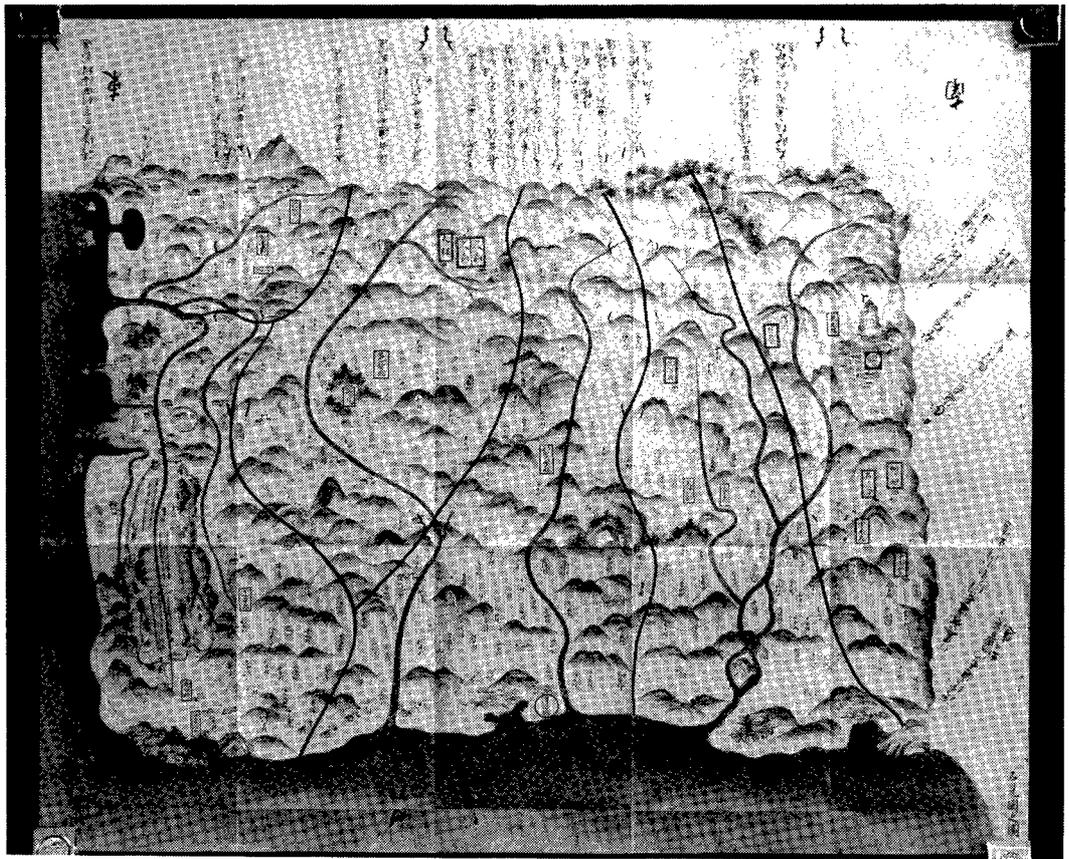


図3 石見国絵図(永青本) 71×85cm, 熊本大学附属図書館蔵

いる。これに対してBグループのうち秋田本と池田家本では津和野・浜田両城をともに丸四角型の共通図式にて図示しているが、毛利家本だけは浜田城を丸四角型、津和野城をそれとは異なる二重四角型にて示している。

毛利家本については、注19で説明したように粗略な模写であって、「津和野」は3文字の城名であって丸四角型では記入しにくいため図式を二重枠の四角型に変えて写したのであろう²⁰⁾。

以上のごとく、Aグループでは城の図式を大名の家格で区別しているとすれば、浜田城が無城主格の丸輪型にて図示されているのが注目される。元和5年出石を改めて丹波の園部に入封した小出氏の居所は城構えであったが、小出氏は無城主格であったため園部城は「城」とは公称できなかつた²¹⁾ というように、同年浜田に入封した古田氏も当初は城主

格でなく、浜田城が陣屋並の丸輪型で表わされた可能性もあるであろう²²⁾。

寛永国絵図諸本の石見国に関して次に問題になるのは、銀山と口屋番所の描写がA、B両グループ間で明らかに異なっている点である。Aグループ両本では佐摩郷の銀山全体に木柵を巡らし、山内には屋根形による町並みを図示しているほか、国内に散在する8カ所の銀山についても木柵による囲いを描いている。これに対してBグループ諸本では佐摩郷の銀山に町並みと囲みの木柵を描かず、国内の銀山はすべて橙色にて着色した短冊形の図式で簡略に図示するにとどまっている。さらに両グループ間での顕著な相違は、Aグループでは佐摩郷銀山の出入り口および国内街道筋の要所要所に設けられていた口屋番所の所在が逐一図示されるのに対して、Bグループでは口屋番所の描写はいっさい省かれている。

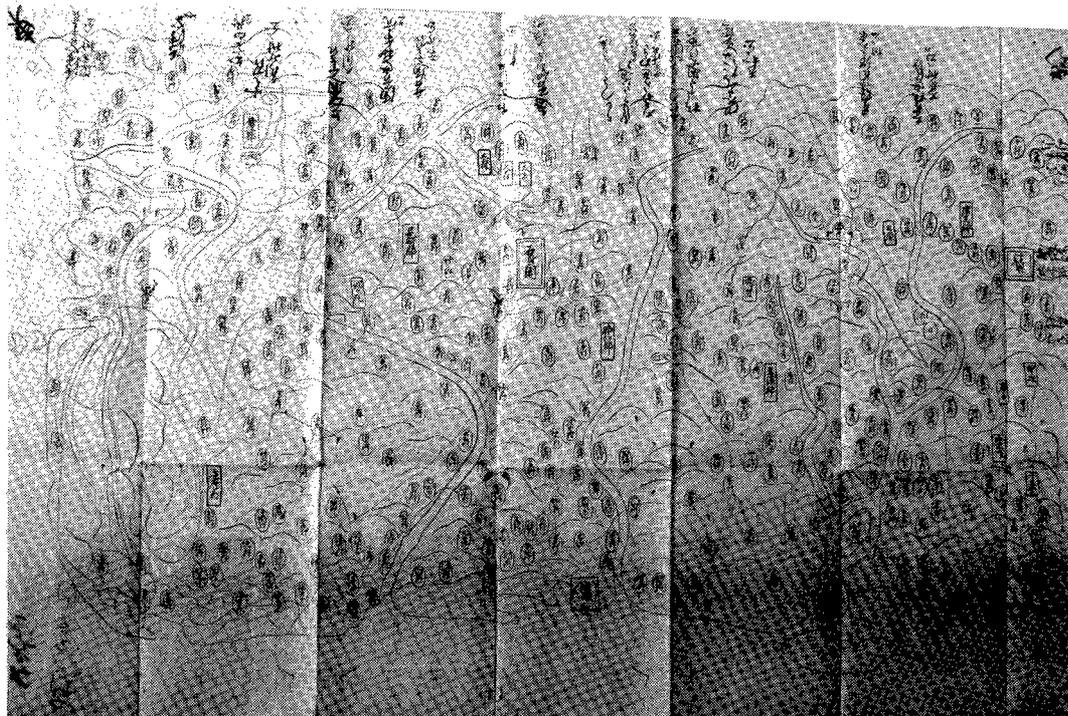


図4 石見国絵図（毛利家本）86×139cm，山口県文書館蔵

以上のように、5所蔵機関に現存する寛永国絵図は転写の流れにより2系統に分かれることが明らかになった。そして、その中の石見国絵図はA、B両グループ間で浜田城と銀山の表現および口屋番所の記載の有無などに相違のあることが明らかになった。前稿にてこれら国絵図の成立が寛永上使の国廻りと関連することを推定した重要な根拠の一つは、永青本と南葵本中の伯耆図に記載される5名の領主名についての年代考証であった²³⁾。このようなことを考えれば、Aグループこそ寛永国絵図の内容をより丁寧を受け継いだ正統な写図であって、Bグループは寛永国絵図を簡略に模写したものが写し伝えられたもの、とくに毛利家本はその典型的な略写図であろうと推測される。

(2) 元和「石見国絵図」と寛永石見国絵図の比較

ここでは寛永国絵図の正統な写図とみなさ

れるAグループの永青・南葵両本中の石見国絵図（以下、寛永図と略称する）をもって当該元和「石見国絵図」（以下、元和図と略称する）との比較を試みる。元和図と寛永図の両者を比較すると、図形の輪郭、地勢、郡区分、小判型の村形による村々の図示などはほぼ同様で、全体的に大きな変化はないが、まず第一に気づくことは図幅の大きさの違いである。

元和図は図幅が大きくて、寛永図に較べると縦横ともに寸法が2倍余ほどもある。寛永図は他国とも共通して、おおよそ1里を2～3寸程度の縮尺で作成されたものとみられて比較的小振りであるが、元和図は1里を4～5寸程度の縮尺による作成とみられて大振りである²⁴⁾。

次に一見して目立つ相違は、元和図では村形内に逐一村高の記載があるのに対して、寛永図においては村高の記載がいっさい省かれていることである。村高の記載を欠くのは全国の寛永国絵図に共通することであって、郡

石高も池田家本の全部と永青本の一部に端書があるものの、他の諸本ではいずれも省かれている²⁵⁾ので、ここでは考察の対象外とする。

元和図と寛永図の内容を比較して、指摘できる変化の主なものは次の通りである。

①元和図においては元来、浜田城とその城下は描かれていなかったが、寛永図においてはそれが描かれている。

②元和図には「銀山城」(山吹城)が描かれているが、寛永図にはそれが描かれていない。

③元和図では佐摩郷銀山の「銀蔵」が木柵で囲まれた山内の中に図示されている。これに対して寛永図では「御銀蔵」が山内を出て蔵泉寺口屋側の大森に移動している。

④元和図には図示されていない邑智郡内の「銅ヶ丸」鉾山が、寛永図には描かれている。

⑤元和図には浜田と広島を結ぶ陰陽主要道の三坂峠越えの街道が描かれていないが、寛永図にはその道筋が描かれている。

⑥元和図では街道筋の宿町を一般の村と区別することなく、すべてを小判型の村形で図示している。それに対して寛永図では宿町を「村」とは区別して「町」と記載し、小判型の村形とは異なる横長の方形による町形を用いて図示している²⁶⁾。

元和図に浜田城の描写がないのは、本図の成立が古田氏の浜田入封以前であるから当然である。寛永図には浜田城が描かれているものの、A・B両グループ図で表現図式の異なることは既に述べたところである。

佐摩郷の銀山についての図示内容の変化で注目されるのは、戦国期に築かれた銀山城(山吹城)の城郭が元和期にはまだ要害山の山頂にその威風をとどめていたとみられることである。しかし、寛永図の描かれた寛永中期頃になると城郭は破却されたか火災で焼失したのか、その詳細は知られていない²⁷⁾ものの、いずれにしろ城郭の姿は失なわれたのであろう。

佐摩郷銀山の主要施設である銀蔵の移転も

注目される。当初山内の銀山城山麓にあった「銀蔵」が、元和から寛永期に間に柵外の大森に移動したものとみられる。移転した「御銀蔵」は木柵を巡らした中に土塀らしきものに囲まれた3棟の建物と、塀の外のもう1棟の建物が描かれている。元和図では町並みが、山内を巡る柵列の内側に限ってのみ図示されるが、寛永図になると「御銀蔵」の移転とともに柵列の外側にも若干の家並みが描かれており、管理機能の移動にともない、移転先の大森で町的形成が始まったことを思わせる。

国内に散在するそのほか8カ所の銀山は、寛永期になっても元和期と同様に機能していたようで、図面での変化はみられない。ただ、寛永図には邑智郡の「銅ヶ丸」鉾山がはじめて図示され、銀山とは異なる図式を用いて表されている。しかも、その山容が強調して描かれているので、中世末期に発見されたというこの銅鉾山は寛永期になって本格的に開発されたのであろう。

寛永期に至って交通環境の整備されたことも窺い知ることができる。主要街道には町建てによる宿町ができ、近傍の村とは性格の異なる集落の形成が進んだことを窺わせる。また、浜田藩の成立により浜田と広島を結び山陽道につなぐ街道の必要が生じて、三坂峠越えの陰陽交通路が新たに開通している。石見国内では幕府代官所の所在する大森と浜田・津和野両城下が要所であって、この3所を結ぶ街道がとくに整備されたようである。一例を挙げれば、津和野と浜田をむすぶ街道筋にある益田は元和図では「地頭所」という地名で記されているが、寛永図では「ます田町」に変えられていて町建てが行われたのであろう。

VI. おわりに

浜田市教育委員会所蔵の「石見国絵図」の作成時期が元和3～5年(1617～1619)であることが判明した。石見国における浜田藩の成

立は元和5年2月に古田重治の入部によって始まるが、本図の成立はその直前ということになるので、本図は古田氏への知行地充行のための検討資料として作成された可能性もあるであろう。このような本格的な国絵図の作成は、通常地元の大名に命ぜられることから、本図も津和野藩主亀井政矩が幕命を受けて作成したものと推測される。

いずれにしろ、石見国では慶長国絵図の現存は知られていないので、この元和「石見国絵図」は石見国全域を描いた最も古い現存絵図ということになる。内容が詳細であることから、本絵図は江戸初期における石見国の自然・政治・経済・交通・鉱山開発などの地域情報を空間的に網羅したきわめて貴重な絵図資料であって、当地域の歴史地理研究に寄与するであろう。とりわけ、最盛期のころの石見銀山が詳細に描かれていて、その当時の銀山の実態を知りうる数少ない資料である。なかでも銀山城（山吹城）の城郭や間歩の位置が具体的に図示されていて、他では知り得ない情報を提供してくれる。そのほか地域史研究に限らず、江戸初期の絵図表現技術などを含めて地図史研究の素材ともなろう。

本稿では、さらに元和「石見国絵図」と寛永石見国絵図との比較によって、若干の地域変化を検討したが、石見国では寛永国絵図より内容の詳しい正保・元禄・天保度の各国絵図写も残されている²⁸⁾ので、これら国絵図との時代を追った綿密な内容比較によって、近世およそ200年間余の地域変化の実態をさぐることも可能となる。

なお、元和「石見国絵図」との照合のため秋田県公文書館など5機関に所蔵される寛永国絵図諸本の内容を比較した結果、それら諸本が図示内容の点から2系統に分かれることをも窺い知った。このことについてはさらに綿密な検討を重ねる必要がある。

(東亜大学工学部)

〔注〕

- 1) 川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』, 古今書院, 1984, 85~113頁。
- 2) 川村博忠「寛永国絵図の縮写図とみられる日本六十八州縮写国絵図」, 歴史地理学37-5, 1995, 1~19頁。
- 3) ①上原秀明「慶長肥後国絵図の押紙に関する考察」, 熊本学園大学論集『総合科学』3-1, 1996, 1~39頁。②磯永和貴「長沢家文書の九州図と寛永巡見使」, 熊本地理8, 1998, 1~10頁。
- 4) 白井哲哉「日本六十余州国々切絵図の地域史的考察—下総国絵図を事例に—」, 駿台史学104, 1998, 117~129頁。
- 5) 浜田市教育委員会所有。市指定文化財。
- 6) 『藩史大事典』6(中国・四国編), 雄山閣出版, 1990, 118頁。
- 7) 国立歴史民俗博物館蔵, 石見亀井家文書。
- 8) 島根県編『島根県史』9, 島根県, 1930, 753頁。
- 9) 『日本歴史地名大系』33(島根県の地名), 平凡社, 1995, 540頁。
- 10) 島根県教育委員会編『歴史の道調査報告書』第3集(銀山街道), 1996, 19頁。
- 11) 『日本歴史地名大系』, 前掲9) 544~545頁。
- 12) 石見銀山資料館学芸員の仲野義文氏にご教示を得た。
- 13) 川村論文, 前掲2) 1~19頁。
- 14) 川村博忠「江戸初期日本総図再考」, 人文地理50-5, 1998, 12~13頁。
- 15) 川村論文, 前掲2) 8~9頁。
- 16) 白井哲哉は前掲4)で寛永国絵図の系統(試案)を示しているが、それとは若干見解が異なる。
- 17) 四角枠の中に丸輪を描き、丸輪を囲んだ四角枠の四隅を黒く塗りつぶし、丸輪の中に城名を記入する。毛利家本は簡略に丸四角を描くだけで黒の塗りつぶしはない。
- 18) 丸輪の中に城名を記入するだけの図式。
- 19) 毛利家本では多くは丸四角型であるが、なかには四角型や二重四角型もあって混用されている。しかし、意味をもって城図式が使い分けられているとは考えられない。同本は全体的に模写が粗略であって、四角内の丸印の中には城名が記入しにくいので、丸を省いて四角型や二重四角型にして写したのであろう。下総, 上総,

- 常陸、三河など国内に城が多数ある国ではすべての城を四角型に写し変えている。以上のような見解から、毛利家本はBグループに含める。
- 20) 丹波の福知山なども同様に二重四角型にて図示している。
 - 21) 加藤 隆『幕藩体制期における大名家格制の研究』, 近世日本城郭研究所, 1969, 64頁および154頁。
 - 22) 浜田藩の成立は元和5年(1619)であって元和一国一城令の出された直後でもあり, 石見国ではすでに津和野城があることから当初, 浜田藩主の古田氏は城主格として扱われなかったのかもしれない。
 - 23) 川村論文, 前掲2) 12~13頁。
 - 24) 慶長国絵図の一般的な縮尺値に相当する。
 - 25) 5所蔵先の寛永国絵図のうち池田家本にはすべてに一国石高と郡名の端書がある。永青本10
- 数点のうち安芸・備前・備中など数点にも同様の端書がある。白井哲哉の紹介によると, 秋田県公文書館には秋田本69枚とは別に関東8カ国分8枚の同種国絵図が現存しており, それらには一国石高と郡名の端書があるようである。白井論文, 前掲4) 119頁参照。
- 26) 寛永国絵図のうち毛利家本等Bグループでは小判型の村形を用いて, 村形内に「町」と記載する。
 - 27) 慶長9年(1604)に山吹城普請の記録(高橋家文書)があるという。『藩史大事典』, 前掲6) 545頁参照。
 - 28) 正保国絵図は国立国会図書館〔WB39-4〕と島根県津和野町郷土館, 元禄国絵図は島根県津和野町郷土館, 天保国絵図(切図)は浜田市郷土資料館にそれぞれ所蔵される。